華麗なるロシア音楽　ウクライナ国立歌劇場管弦楽団

ウクライナの至宝、ウクライナ国立歌劇場管弦楽団が チャイコフスキーの〝心の祖国〟の名にかけてスラヴ魂の精神を描き切る！

〝スラヴの母〟ウクライナ

まるで、うねりを打って押し寄せる大波のような音の厚み。一方で、優しさと懐かしさをたたえながら胸にしみ込んでくる素朴な民謡風の旋律。さらには、甘美でセンチメンタルなメロディー、強い意思を持った激情の音。全体に漂うのは、一徹な、内に秘めた熱いスラヴ魂。チャイコフスキーの音楽には、いつ聴いても心揺り動かされる〝エモーショナルエッセンス〟が溢れている。そんな、情感たっぷりのチャイコフスキーの音楽を携えて、ウクライナ国立歌劇場管弦楽団がやってくる。

ソ連崩壊にともなってウクライナが独立して早19年。もともと民族意識が強く誇り高い土地柄であると同時に、人々は文化的意識も高い。

私たちがウクライナの首都キエフを訪れて気づくのは、名だたる文化施設に「タラス・シェフチェンコ記念」という冠名が付いていることだ。ウクライナ人ならだれもが知っている、いや、敬愛してやまない国民詩人の名だ。キエフの高台にあるウクライナ国立歌劇場も「タラス・シェフチェンコ記念」の名を冠し、正面入口には彼の胸像が飾られている。つまり、〝この歌劇場こそがウクライナの誇り〟であることを示しているのだ。

ソ連邦時代を知っている人たちにとっては、現代のロシアもウクライナもイメージの中では一緒になってしまいがちだが、同じ東スラヴ人が多数を占めることでは確かに同じだ。ただ、ウクライナには〝スラヴの母〟という思いがある。本当のスラヴの精神や生活はここから四方八方に広がった、という意識だ。旧ソ連時代、名だたる音楽家たち（リヒテルやオイストラフなど）の多くが、ウクライナ出身であったことはよく知られている。つまり、当時私たちはウクライナ人による、チャイコフスキーの名演奏を聴いていたことになる。ウクライナ国立歌劇場の歌手もオーケストラも、当時からそうした〝スラヴの母〟としての意識を持ち、今日に至っている。

ウクライナとチャイコフスキー

その〝スラヴの母〟意識に支えられて、ウクライナ国立歌劇場管弦楽団が今回の公演に持ち込んだオール・チャイコフスキー・プログラム。

実はチャイコフスキーの家系は、ウクライナに発している。祖父の代に伝統的なウクライナの苗字であるチャイカ（カモメの意）という名をロシア風に改めたのだという。チャイコフスキーにとって、ウクライナは「心の祖国」なのだ。自作のオペラをキエフのウクライナ国立歌劇場で上演することにしたのも、このことと無縁ではないし、実際にその演奏に触れたチャイコフスキーが「モスクワの演奏に引けを取らない」と舌を巻いたというから、チャイコフスキーも自らの出自を誇りに思ったに違いない。

プログラムの最初を飾るのは幻想序曲「ロミオとジュリエット」。あの有名なシェイクスピアの悲恋物語の情景が、目に浮かぶようなドラマチックな音楽だ。続くピアノ協奏曲第1番はチャイコフスキーの代表作、というよりも、古今のピアノ協奏曲の中でも王者と呼んでいい大作にして、名作。独奏はウラジーミル・ミシュク。チャイコフスキー国際コンクール第2位の大型ピアニストが十八番としている曲だけに、このコンサートを一層輝かしいものにしている。そして、交響曲第5番。ここにはチャイコフスキーのすべてが詰まっている。聴くものを誘惑し、包み込み、酔わせ、圧倒する。私たちはチャイコフスキーの熱い魂に、ただただ感服するのみだ。

スラヴ世界の名門オーケストラとチャイコフスキーの名曲とのベストマッチング。聴き逃せない！

ウクライナ国立歌劇場管弦楽団

ウクライナ国立歌劇場管弦楽団は1834年の誕生以来の歴史と伝統を誇り、世界各地で演奏を行っている。1880年代に劇場はチャイコフスキーを招いて、オペラ『スペードの女王』『エフゲニー・オネーギン』などを上演し、成功をおさめる。1891年にはチャイコフスキー自身の指揮で彼の作品を上演し、劇場に対して、キーロフ劇場やボリショイ劇場に続く劇場として褒め称えた。そのほか、リムスキー＝コルサコフ、ラフマニノフ、グリエール、グラズノフ、ショスタコーヴィチなど錚々たる作曲家がこのオーケストラを指揮している。

近年はチャイコフスキー、ムソルグスキー、ヴェルディ、プッチーニなどのオペラ、チャイコフスキーのバレエ、ベートーヴェン、ブラームス、マーラーなどの交響曲を演奏。オイストラフ、ギレリスなどの巨匠とも共演している。

1989年にヴォロディミール・コジュハルが首席指揮者に就任し、一層の発展を遂げて現在に至っている。ドイツ、フランス、ポーランド、スイス、オランダ、スペイン、ユーゴスラビア、ルーマニア、ブルガリア、チェコなど各地で公演を行い、好評を博している。

ウラジーミル・ミシュク

サンクトペテルブルグ生まれ。幼い頃より才能を発揮し、7歳で数々の名ピアニストを輩出したサンクトペテルブルグ音楽学校のV.クンデ教授に師事。レニングラード音楽院に進み、在学中に「全ロシアピアノコンクール」で見事に優勝を飾る。さらにロシア作品の最優秀演奏者に対して贈られる、音楽家協会賞も受賞。卒業後フィンランド、スペインに留学する。1990年には、4年に一度開催される世界的なコンクール「第9回チャイコフスキー国際コンクール」で第2位に輝き、国際的に注目された。その実力とハンサムな容姿で人気を博したミシュクは、フランス、イギリス、ドイツ、イタリアほかヨーロッパ各地、南米、日本などでコンサートツアーを行っている。その他、教育活動や国際音楽祭の芸術監督、コンクールの審査員、CDの録音など精力的に活動をしている。

ご注意とお願い・会場内における飲食、喫煙はご遠慮ください。・写真撮影、録画、録音等は一切禁止とさせて頂きます。・開演後のご入場は制限させて頂く場合もございます。・曲目の変更がある場合もございます。予めご了承ください。